

11月16日（日）サムエル記第一8章10～18節

「その日、あなたがたが自分たちのために選んだ王のゆえに泣き叫んでも、その日、主はあなたがたに答えはしない。」（18節）

11節の王の権利として語られているのは、王を護衛するための兵士として民が徴用されるということです。「自分の戦車の前を走らせる」とは、王の戦車を護衛する歩兵を指しています。12節では、男たちに対して3つの王からの徴用が命じられると言われています。一つが千人隊の長や五十人隊の長として任命するための軍隊が組織されます。二つ目が、王室の耕作地を耕したり、刈り入れさせるために、三つ目が武器や戦車の部品などの軍需物資を作るために人が集められます。さらに13節からは、あなたがたの娘たちと言っていますが、男だけではなく女たちも王の権利によって徴用されます。その目的は、香料作りや料理をしたり、パンを焼いたりさせることです。14節では、自分たちの土地が王によって没収され、それが王の家に与えられます。当然ですが、耕す土地がなくなりますから生活に困るようになります。15節の「あなたがたの穀物とぶどう畑の十分の一を取り」というのは、税として王が人々から収穫の十分の一を集めるということです。また16節と17節前半では、自分たちが所有している奴隷や女奴隷、家畜などの良いものを王に差し出さなければなりません。それだけではなく、17節では「あなたがた自身は王の奴隷となる」と言われています。まさに王は自らの王権を民の上に行使し、自分のほしいままに振る舞おうとします。その結果、イスラエルの民は自分たちが選んだ王のゆえに泣き叫ぶことになります。まさに自分たちが主に逆らって、王を求めた結果ですが、自分たちの選んだ責任は自分たちで負っていかなければなりません。さらに「主はあなたがたに答えはしない」とも言われています。主の恵みとあわれみによる神政政治を捨てて、自らの意思で王を立てることを求めながら、こんなはずではなかったとの思いの中で、主に助けを求めるのはあまりにも虫がよすぎるのではないのでしょうか。主に助けを願うのであれば、私たちも主に従う歩みをすべきです。

11月17日（月）サムエル記第一8章19～22節

「いや。どうしても、私たちの上には王が必要です。そうすれば私たちもまた、ほかのすべての国民のようになり、王が私たちをさばき、私たちの先に立って出陣し、私たちの戦いを戦ってくれるでしょう。」（19、20節）

19節で「しかし民は拒んで、サムエルの言うことを聞こうとしなかった。」とあります。恐

らくサムエルの言っていることがあまりにも否定的で、自分たちの考えとは大きく異なっていたからでしょう。もしサムエルが、民の意見に賛同するようなことを言えば、民は喜んでサムエルのことばを受け入れたはずです。牧師が礼拝説教やみことばの扉において、また個人的に面談する中で、自分を喜ばせるようなことを語ったり、賛同するような意見を与えてくれるなら、喜んで耳を傾けるでしょう。しかし、自分の意に反するようなことを語ったり、耳の痛いことを言われると拒んで、牧師の言うことを聞こうとしないということはないでしょうか。どんな言葉であっても、それが聖書から語られているなら、謙遜になって耳を傾けるべきです。

さらに、「いや。どうしても、私たちの上には王が必要です。」とっていますが、その理由は、ほかのすべての国民のようにになりたいということと、神ではなく王が自分たちをさばくことを望み、王が先頭に立って自分たちのために戦ってくれると信じていたからです。王は強大な権力をもって国と国民を支配することには決して思いが及びませんでした。私たちは信仰生活の歩みにおいて、自分の将来についてまるで空想の世界を生きているかのように、あれこれと思い描きます。そうなりますと不思議なのですが、自分にとって都合のいいことしか思い浮かばず、それこそが自分にとっての幸いと思い込んでしまいます。しかしこれまでの人生の歩みの中で多くの人が分かっているとは思いますが、往々にして自分の思いどおりに物事が進むということはないものです。そして、主を拒み、主の言われることを聞かないで、自分勝手に歩んで、最後にこんなはずではなかったと思って、主に助けを求めても遅いのです。主のみことばを聞き、厳しいことばも謙遜になって聞きながら、日々主に従う、地に足のついた信仰生活を送るべきです。

11月18日(火) サムエル記第一9章1, 2節

「キシユには一人の息子がいて、その名をサウルといった。彼は美しい若者で、イスラエル人の中で彼より美しい者はいなかった。彼は民のだれよりも、肩から上だけ高かった。」(2節)

イスラエルの民が王を求め、主がサムエルに対して「彼らの言うことを聞き、彼らのために王を立てよ。」(8:22)と王を立てることを神が認められたことに続いて、サウルが登場します。まず1節ではサウルの父親であったキシユの系図が記されています。そして「彼は有力者であった」とあります。この言葉には、広い意味がありますが、3節でキシユは雌ろば数頭を持つほど財力があつたことは間違いありませんし、イスラエルの中で影響力を持つ人であった可能性も十分にあります。ですから、ある意味サウルは有力な家系の出であつたことが分かります。2節ではサウルのことが紹介されていて「彼は美しい若者で、イスラエル人の中で彼より美しい

者はいなかった。」とされていますが、外見が美しく、背も高かったことが分かります。容貌についてはある意味王として申し分ありませんでしたし、人々が王としたいと思わせるような条件を備えていました。しかし、神の視点は異なっていました。1 節に「ベニヤミン人」という言葉が二回出てまいりまして、サウルがベニヤミン族の出であったことが分かります。イスラエルにおいてベニヤミン族は、最も小さな部族でありました。ですから、21 節でサウル自身も「私はベニヤミン人で、イスラエルの最も小さい部族の出ではありませんか。」と言っているとおりのことです。しかし、人は外見を見ますが、主はそうではありません。むしろ有力者の息子で、容姿は完璧であることよりも、イスラエルの中の最も小さな部族の出であるサウルを王として立てることが主のみどころだったのです。召しから来る主の働きにおいては、小ささは何の問題もありません。むしろ主は最も小さな者を召して、その者にご自身の働きをさせることをみどころとされるお方です。

11月19日(水) サムエル記第一9章3～14節

「ご覧ください。この町には神の人がいます。この人は敬われている人です。この人の言うことはみな、必ず実現します。今そこへ参りましょう。私たちが行く道を教えてくれるかもしれません。」(6節)

3 節でサウルは、父親からいなくなった数頭の雌ろばを探しに行くようにと命じられます。この当時、ろばは貴重な財産だったからです。そしてあちらこちらを懸命に巡り歩きながら探しましたが、結局見つかりませんでした。そして、父親が心配するといけなからと、探すのをあきらめて帰ろうと言いました。すると一緒にいたしもべが、ツフの町に敬われていて、言うことはみな実現する神の人がいるので、その人に聞けば、どこへ行くべきか教えてくれるかもしれないと提案します。しもべの持っていた四分の一シェケルを持ってサウルはその神の人に会いに出かけて行きました。11 節で二人は、神の人がいる町へ向かう坂道を登って行く途中で、水を汲みに出て来た娘たちに出会います。彼らは、その娘たちに予見者はいるのかと尋ねます。12～13 節で、娘たちは、その人が今日高き所で民のためにいけにえをささげることになっていて、急げば、夕方の食事前にその人に会えることを伝えます。そして、14 節で町に入りかかった時に、高き所に上ろうとして二人の方に向かって出て来たサムエルに会うことができました。

雌ろばがいなくなったこと、探しに行ったが見つからなかったこと、しもべがサムエルのことを告げたこと、二人が出会った娘たちが高き所でいけにえを献げようとしているサムエルの

ことを告げたこと、すべてが神を信じない人たちにとっては偶然に思えたり、作り話のよう
に感じられることでしょう。しかし地にあるすべてのものをご支配しておられる神は、すべて
のものを用地ながら、ご自身のご計画やみこころを成し遂げられます。もし私たちが信仰の目
をもって一つ一つの出来事を見ていくなら、そこに私たちは見えない神のみわざを確かに見る
ことができます。

11月20日(木) サムエル記第一9章15～17節

**「明日の今ごろ、わたしはある人をベニヤミンの地からあなたのところに遣わす。あなたはそ
の人に油を注ぎ、わたしの民イスラエルの君主とせよ。彼はわたしの民をペリシテ人の手から
救う。民の叫びがわたしに届き、わたしが自分の民に目を留めたからだ。」(16節)**

主は、あらかじめサウルをイスラエルの王とされることをみこころとして計画しておられま
した。ですから、主はサウルが来ることを前の日にサムエルに告げていたのです。16節では
「わたしはある人をベニヤミンの地からあなたのところに遣わす。」ここで言われている「ある
人」とはサウルのことですが、神様はサウルをサムエルのところへ遣わすと表現しています。
サウルが全く意識していないところで主ご自身がすべてを整えて、まさに遣わされるかのよう
に、サウルはサムエルのもとへと行こうとしています。

サウルに任職の油注ぎをもって君主に任じるように言われていますが、その君主となる目的
は、「彼はわたしの民をペリシテ人の手から救う」ということでした。7章10節を見ますと、
サムエルの叫びに主が答えてイスラエルがペリシテを打ち負かすようにされました。しかし、
サウルが王になってからは主の代わりにサウルがペリシテ人の手から救うようにされます。そ
れは、主が民の叫びを聞かれた結果です。主は罪深い民の叫びをも聞かれ、自分の民に目を留
め、必要な助けと救いを与えられるあわれみ深いお方です。17節でサムエルがサウルを見
ると、主は彼に「さあ、わたしがあなたに話した者だ」と、はっきりと分かるかたちで主はサウル
のことをサムエルに告げます。主は、そのようにして時にはっきりと分かるかたちでご自分の
みこころを明らかにされます。私たちもそれに従いましょう。その後「この者がわたしの民を
支配するのだ」と言い、人々をペリシテ人の手から救う者であると同時に、支配する者となる
負の面も強調されています。私たちは、自分の思いや考えをもって歩む時に、自分に都合のい
いことしか考えない傾向がありますが、必ずプラスの面とマイナスの両方の面があることを忘
れてはなりません。そして、自分が決断した責任は自分で負っていかなければなりません。し
かし私たちが主のみこころに沿ったかたちで導かれていくなら、すべての責任は主が負ってく

ださり、私たちもすべてを主にゆだねていくことができるのです。そこに、平安な人生があります。だからこそ、主に従うことは平安な人生の第一歩なのです。

11月21日(金) サムエル記第一9章18～21節

「私はベニヤミン人で、イスラエルの最も小さい部族の出ではありませんか。私の家族は、ベニヤミンの部族のどの家族よりも、取るに足りない者ではありませんか。どうしてこのようなことを私に言われるのですか。」(21節)

サウルは、サムエルとは初対面だったのでしょう。サムエルとは気づかず、彼に近づき、「予見者の家はどこですか。教えてください。」と尋ねます。19節で、サムエルは、サウルに自分が予見者であること、先に高き所に上るよとということ、そこで一緒に食事をする、そして次の朝にサムエルがサウルを送ることを告げました。さらにサムエルは予見者らしく「あなたの心にあるすべてのことについて、話しましょう。」と言いました。ここで、サウルの心にあったのは、まず一つが20節にありますように三日間探したけれど見つからなかった数頭の雌ろばのことでした。その雌ろばについては、見つかっているのに気かけないようにしてくださいと言います。そして、サウルの心にあったもう一つの別のことは、民が望むイスラエルの王がだれになるのかということでした。そこでサムエルは、「全イスラエルの思いは、だれに向けられているのでしょうか。あなたと、あなたの父の全家にではありませんか。」と、サウルこそが民が望む王になることを伝えます。それに対してサウルは、21節にありますように、自分がイスラエルの中で最も小さい部族であるベニヤミン族の出であることやベニヤミン族の家族の中でも、どの家族よりも取るに足りないことを理由にそれを拒もうとします。

私たちも主の召しに答えようとする時や教会の奉仕の働きを依頼された時などに、しばしば自分の足らなさやコンプレックスに感じていることなどを理由にして断ったり、躊躇することはないでしょうか。しかし、主は私たちのコンプレックスに感じていることや弱さや足らなさ、能力不足、罪深さなどすべてご存じの上で、ご自身の働きや主の教会の働きに召そうとしておられます。主の招きや召しに信仰をもって答える者とさせていただきます。

11月22日(土) サムエル記第一9章22～27節

「あなたは、ここにしばらくとどまってください。神のことばをお聞かせしますから。」(27節)

高き所でいけにえを献げた後、広間に入り、三十人ほどの客たちのいる中でサウルを上座に

着かせます。そして、サムエルはサウルのために取っておいたごちそうを出すように料理人に命じ、サウルはサムエルとともに食事をしました。そして25節では、高き所から町に戻り、サムエルはサウルと屋上で話します。どんな話しをしたのだろうかと興味は尽きませんが、内容はもちろん分かりません。翌朝早く、サムエルがサウルを呼んで起こし、サムエルは町外れまでサウルとしもべを見送ります。そこで、しもべを先に行かせ、サウルにもう少しとどまるように言い、「神のことばをお聞かせしますから」と言いました。

これからイスラエルの王として立てられようとしていたサウルに必要なことは、神のことばを聞くということでした。王となることは民の要望でもあったとは言え、サウルを王として立てられるのは主ご自身だからです。サウルは神のことばを聞き、神のことばによって整えられて、王の任職を受けることが必要でした。それと同様に、私たちも主の働きにあずかる時には、まず主のことばを聞かなければなりません。主のことばによって主のみこころを知り、主のことばによって召しを確認し、主のことばによって励ましを受けて、私たちは主の働きに臨むのです。しかし、その働きに就く前に主のことばを聞けばいいということではなく、その働きに就いてからも継続的に神のことばを聞き、主のみこころや主ご自身を常に知らなければなりません。それが主に仕えるということです。